

「助動詞ラム」をめぐって：その形態論的位置づけと関連する問題

笠間，裕一郎
東京外国語大学大学院

<https://doi.org/10.15017/1654567>

出版情報：九州大学言語学論集. 36, pp.1-27, 2016. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室
バージョン：
権利関係：



「助動詞ラム」をめぐって

——その形態論的位置づけと関連する問題——

笠間 裕一郎

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

アドレス非公開

キーワード：形態論、「助動詞ラム」、音調、アクセント、付屬語

1 はじめに

これまでの、奈良時代（西暦 710～793 年）奈良方言（以下上代語と言及）及び平安時代（西暦 794～1192 年）京都方言（院政期（西暦 1086～1192）含む。以下中古語と言及）の日本語を対象とする古代日本語の研究は、所謂「四大文法」の枠組みのもとで考察が進められてきた處である。現在でも、この流れに沿った研究が國語學におけるメインストリームである。

他方で、特に戦後であるが、この言語に對して言語學的な觀點からの分析が進められてきた事も事實である。そして、この方面からは、國文法での所謂「助動詞」は實の處付屬形式（服部四郎(1950)）の一つである接辭である事が示されてゐる。

本稿での主要考察対象である所謂「助動詞ラム」もその一つである（例へば Vovin(2003)）。しかしながら、「接辭」と一口に言つても、それが語形變化においてどのような位置を占めてゐるのかによつて、「派生接辭」であるのか、將又「屈折接辭」であるのかが異なってくるし、そもそもこの「助動詞ラム」が「接辭」であるのかどうか——實際屈折する倚辭とする大木一夫(2010)が存在する——も改めて言語學的觀點から考へ直してみるべき事柄である。

そこで本稿では先づ第一に、この「助動詞ラム」の形態論上の位置づけについて考察し、その基底形について考察する。

この「助動詞ラム」の形態論上の位置づけが明確になると、これに

関連するいくつかの形式及びトピックについても、どの様に考へるべきか明らかになる。本稿では第二にこれについて述べる事とする。

2 考察の基點となる形態論上の諸概念について

どの様な學問でもさうであるが、學問上の概念についての共通理解がない事には嚴密な議論も明確な議論もできない。

處が、形態論においてはそもそも「語」の一般的定義が難かしい上に、いくつかの術語は定義に諸家異なりが見られる。

そこで本稿では、以下の様な定義を採用する。

(1)

- a.語基(base) 接辭が付けられる語の部分。より抽象的には、形態論的に複雑な語の語基は、形態論的操作が適應される要素
- b.語幹(stem) 屈折接辭が付く語の部分
- c.語根(root) あらゆる構成的形態素に更に分析され得ない語基
- d.自立語 音韻的にも文法的にも獨立したドメインを形成する形態素
- e.付屬語 音韻的には獨立しながら、文法的には他の形態素に依存する形態素
- f.倚辭 音韻的には依存しながら、文法的には獨立したドメインを形成する形態素
- g.接辭 音韻的にも文法的にも獨立したドメインを形成する形態素

((1)a,b,c は Haspelmath and Sims(2010)を参照。拙譯。)

Haspelmath and Sims(2010)は形態論の一般的な教科書である。共著者の一人である Haspelmath には「語」に就いての通言語的觀點からの研究が存在する (例へば Haspelmath(2011))。(1)a,b,c はこの様なバックボーンに基づく廣範な言語の考察を基礎とした定義であり、「助動詞ラム」の言語學的記述に當つては、最も穩當な定義であると思はれるのでこれを採用する。

(1)d から(1)g は以下の様な表 1 の形で纏められる¹。

¹ これについては下地理則先生の御教授による。このアイディアは 2013 年度九州大学大学院人文科学府「記述言語学研究Ⅲ」の授業において示されたものである。

表 1 形態論的諸単位の分類

音韻的\文法的	獨立	依存
獨立	自立語	付屬語
依存	倚辭	接辭

また、「語」については音韻語と文法語を分立する。

音韻語とは音韻論的に異なるドメインをなす形式であり、今回問題にする古代日本語では音調上獨立したドメイン（所謂國語學的「アクセント」即ち形態素に固有の音調を持つドメイン）である。文法語とは形態統語論的に獨立したドメインであり、具體的には服部四郎(1950)の示す三原則（と原則一の附則）²何れかを満たすドメインである。特に被修飾語となる動詞・形容詞・名詞は、今回問題にする古代日本語では、「一定の活用形を要求する」形式である³。これを表 1 の分類基準とすると、次の表 2 の様になる。

表 2 形態論的諸単位の分類

	文法語	非文法語
--	-----	------

² この三原則は次の通り。服部四郎(1950)より以下一部若干改めて引用する。

原則Ⅰ．職能や語形変化の異なる色々の自立形式につくものは自由形式（すなわち、「附屬語」）である。

附則 1 自立形式につくというだけでは、附屬語と認めるわけには行かない。英語の *dog, dogs* の /z/, *sing, sings* の /z/, ラテン語の *puella* 《娘》, *puellae* 《娘の》の /e/などは、同一の職能の、1 種類の自立語のみにつくから、附屬形式と認められる。（中略）

日本語の *yomumai, yomuna*（禁止）; *yomimasu, yomitai* などの *-mai, -na, -masu, -tai* など同様に附屬形式と考えられる。（後略）

附則 2 附屬形式につくものは、勿論附屬形式である。日本語の *ôkina, ciisana* の *-na* は *kôhuku na, sizukana* の *na* と形も意味も同じであり、*sudeni, honnno(sukosi)* の *-ni, -no* も *sizuka ni, haruka ni*; *sukosi no, iroiro no* の *ni, no* と形が同じで意味を一部分同じであるが、*ôki-, ciisa-, sude-, hon-*などが附屬形式であるから、これらの *-na, -ni, -no* も附屬形式である。

原則Ⅱ．二つの形式の間に別の単語が自由に現れる場合には、その各々は自由形式である。従って、問題の形式は附屬語である。

原則Ⅲ．結びついた二つの形式が互に位置を取りかえて現れ得る場合には、両者ともに自由形式である。

この原則は基本的に服部四郎(1950)の言ふ「附屬語」の見分け方であるが、本稿で言ふ「文法語」は上三原則に於ける「自由形式」に當る。従つて「文法語」か否かの判断に是が利用できる。

³ 是は 3.1 に述べる如く分析の結果である。

音韻語	自立語	付屬語
非音韻語	倚辭	接辭

當然ながらこれら自立語や接辭は連續體をなしてゐる。現實の言語においてはある一つの形式が（普通はどれか一つだが）、複数のカテゴリに屬する場合がありうる。

とは言へ、ある形式とある形式について比較對照するには、何らかの基準に基づくカテゴリ化は必要である。又、「複数のカテゴリに屬する」といふ認識もまたカテゴリの存在を前提としなければ成り立ち得ない。これら(1)d から(1)g はある種の比較、對照、分類を可能にする二値論理的カテゴリと考へられたい。

以下では、個別具體的な形式についての考察を行ふ。

3 「助動詞ラム」の形態論的位置づけ

3.1 「助動詞ラム」の形態統語的位置づけ

まづは、本稿の主要考察対象である「助動詞ラム」が派生接辭であるのか屈折接辭であるのか、或いは文法語であるのかを確定する。

派生接辭と屈折接辭も連續體をなすが⁴、この言語では、派生接辭とは文法語の非終端形式であり、屈折接辭とは文法語の終端形式である接辭の事を指す。

接辭の順序としては、Greenberg(1963)以來の議論があり、Booij(2012)はこの一般的配列順序を次の様にまとめてゐる。

(2) [屈折接頭辭-派生接頭辭-語根-派生接尾辭-屈折接尾辭]

ここでの考察対象である「助動詞ラム」は國文法で言ふ處の「動詞」の後に現れるので、接頭辭ではない。また、單獨で現れる事がなく、先行する形式の品詞は「動詞」或いは國文法で言ふ處の「助動詞」で、この「助動詞」は形態論的に動詞若しくは助詞(Particle)+動詞、或は派生接辭である⁵。さらに中古語では常に「動詞」が u で終はる。

⁴ Haspelmath and Sims(2010)では、Dichotomy approach と Continuum approach があり、何れを取るかは論者の決断によるとされてゐる。本稿では、上述の如く兩者を連續してゐると認めた上で、是等をカテゴリとして立てる以上、先の如く線引きを行なひ、二値的なカテゴリとして扱ふ。

⁵ 国立国語研究所「日本語歴史コーパス」平安時代編「中納言」（以下「中納

また、この言語の記述言語學的分析を進めてゆくと、文法語の内、被修飾語となる語は「用言」に一定の「活用形」を要求する事が判明する⁶。處が、この「助動詞ラム」は「ラ變」動詞では所謂「動詞連體形」を、「ラ變」動詞以外では所謂「動詞終止形」を取る。

- (3) a. 人やあるらむとおぼせど、例の童ばかりを御供にておはしまして、(後略)

(『和泉式部日記』)

- b. 「そこに、そのことどもは知るらむ、な。(後略) (『落窪物語』卷之四)

(下線は筆者による。以下同じ。)

加へて、この「助動詞ラム」はその「活用形」として「終止形」「連體形」「已然形」しか持たない⁷。しかも所謂「助動詞の相互承接」に

言」と言及する。)で検索するに、この手の「助動詞」は以下の通りである。

表 i 幾つかの所謂「助動詞」の用例数とその分析

「助動詞」	用例数	分析	「助動詞」	用例数	分析
さす	2	派生接辭	ぬ	93	派生接辭
ざる	5	派生接辭	むず	5	派生接辭若しくは amu#z-
す	2	派生接辭	らる	10	派生接辭
たる	2	派生接辭	る	28※	派生接辭
つ	150	派生接辭	んず	3	派生接辭若しくは am#z-
なる	25	助詞「ニ」+動詞「アリ」	合計	325	

(※ 1 例所謂「助動詞リ」とみられる用例が存在する。)

猶、中古語においては、統語論的には助動詞が存在する。しかし形態論的には**動詞も助動詞も同じ接辭を取る**ので、助動詞を認める積極的理由はないのである。

⁶ 所謂助詞「ト」・「トモ」や「禁止ナーコソ」が「カ變動詞「來」」或いは「サ變動詞「爲」」を(動詞連續の末に)取る時を除く。實は「禁止ナーソ」も妥當な理由があつて「カ變動詞「來」」「サ變動詞「爲」」を(動詞連續の末に)取るとき「不規則」になつて居る。是はこの言語の屈折全體に就ての考察が必要となる。本稿は屈折全體に就ての議論ではないので、別に論じる。

⁷ 他の「活用形」、例へば「連用形」が見られないのは偶然とは言ひがたい。今「中納言」所收の作品『枕草子』を對象に、「助動詞ラム」に先行する「動詞」(言語學的には動詞語根と派生接辭。但し恣意的な解釋を防ぐ爲「中納言」の「語」の判定により、是に對するさらなる言語學的分析はしない。)の出現数を比較基準として、それら「動詞」の「連用形」「命令形」の出現数を

において最下位に位置する形式である（大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編(1990)）。従つて、

- (4) a. 單獨で現れる事なく、
 b. 特定の品詞に屬する語とともに現れ、
 c. 常に「動詞」が u で終はり、
 d. 一定の「活用形」を要求せず、
 e. それ自身は特定の「活用形」のみを持ち、
 f. 連續する形式の最末尾に現れる。

(4)a および(4)b の事實から、この形式が（文法的に獨立した形式ではないので）文法語ではない事が明らかである。次に(4)c および(4)d の事實から、u で始まる接辭である事が明らかである。最後に(4)e および(4)f の事實から、この「助動詞ラム」が屈折接尾辭に相當する事が明らかである⁸。

もう一つ、「アクセント」の面から、「助動詞ラム」が屈折接辭である事を述べる。

所謂「動詞終止形」「動詞連體形」「動詞已然形」の「アクセント」は次の通りである（秋永一枝(1974)(1991)に基づく）。

- (5) a. つくとも（告ぐとも）（「終止形」）[HL]

比較すると表 ii の通り。但し、「連用形」は「中納言」依據テキストで「動詞」が後續する場合と記號が後續する場合、即ち後續形式が接辭ではない場合のみを對象とする。

表 ii 「ラム」先行形式とその「連用形」「命令形」夫々の例數

「ラム」（「終止・連體・已然形」）先行形式		「ラム」先行形式の		
		連用形		命令形
延べ	104 例（歌謠 6 例除外済）	動詞後續	1029 例	73 例
異なり	36 例	記號後續	78 例	

表 ii から見て取れる様に、「連用形」の出現數は壓倒的に多い。「助動詞ラム」の三形の合計を比較對象としても同様である。命令形單獨であつても、「助動詞ラム」三形の合計の四分の一に達する。假に「助動詞ラム」に-rami の如き「連用形」、-rame の如き「命令形」が存在したとすれば、それが現はれる筈である。」

⁸ 例へばこの言語の「連用形」の屈折接尾辭は-i、所謂「助動詞ズ」は「否定」を表す屈折接尾辭-azu であるが、これらを「助動詞ラム」が取ることはない。ほかの派生接辭はこの様なことがない（様である）。

- 上平○○（伏片・梅・尊恵）
 b. つくるなり（告ぐるなり）（「連體形」）[HHH]
 ○上上○○（伏片・家）
 c. ゆけは（行けば）⁹（「已然形」）[HLL]
 上平平（伏片・訓）
 (6) a. ありと（有りと）（「終止形」）[LF]
 平上平（伏片）
 b. あれと（有れど）（「已然形」）[LF]
 平上○（顯天片・顯大）
 c. あるのみ（有るのみ）（「連體形」）[LH]
 平上○○（伏片・家）

一般に、所謂「高起式」の時には文法語末が「動詞終止形」「動詞已然形」で[HL]である一方、「動詞連體形」の時には[HH]である。「低起式」の時には夫々[LF]・[LH]である。

一方で、「助動詞ラム」の各「活用形」の「アクセント」は次例から「終止形」「連體形」「已然形」何れも[LF]であつたとみられる¹⁰。

- (7) a. とはるらむ（問はるらむ）（「連體形」）
 上上平平上（顯天片）
 b. みらむ（見らむ）（「終止形」）
 ○平上（梅・京中・高嘉・伊・清聲）

（上記略記號の説明 平＝平聲點、上＝上聲點、去＝去聲點、○＝聲點なし、太字は双點。）

（伏片＝伏見宮本古今和歌集（院政期）、顯天片＝平假名本顯昭古今集注（院政期）、顯大＝片假名本顯昭古今集注②（院政期）、梅＝梅澤家本古今和歌集（鎌倉時代）、尊恵＝堯恵本古今集聲句相傳聞書（南北朝・室町）、家＝家隆本古今和歌集（院政期）、訓＝古今訓點抄（南北朝・室町時代）、京中＝中院本古今和歌集①（院政期）、高嘉＝高松宮嘉祿本古今和歌集（院政期）、伊＝伊達家本古今和歌集（院政期）、清聲＝付頓阿眞筆古今集聲句本（室町時代）、各資料と差聲狀況は、秋永一枝（1991）を参照）

⁹ 「終止形」「連體形」「已然形」の最小三對が『古今和歌集』聲點本には無いための次善の措置。

¹⁰ 何故「助動詞ラム」では「終止形」と「連體形」で「アクセント」的に中和が生じてゐたかは現状では不明である。「助動詞ラム」の成立問題とも関連しようが、両者が「アクセント」的に中和していた事自体は説明や解釋に先行する記述的事實である。

(8) a. 『袖中抄』(第二十(高松宮本))

コモチマチヤセヌラム(子持待ち瘦せぬらむ。「終止形」)

上上上平上上平上平上

(院政期から鎌倉初期差聲。同時代の「アクセント」資料。上聲點が[H]もしくは[F]ピッチを現はす四聲方式(秋永一枝他(1998))による資料)

b. 『日本書紀』聲點本

比騰瀨都羅武箇(人見つらむか。「連體形」)(卷第二十五)

上平去上平平上(北野本、兼右本、内閣文庫本)

([F]ピッチが東聲點・上聲點及び平聲點で現はされる「見かけ上の四聲方式」資料¹¹(鈴木豊(1999))。平安時代末頃までの「アクセント」を反映(秋永一枝他(1998))。)

『古今和歌集』聲點本は四聲方式による差聲資料と言はれ、平聲點が[L]ピッチを、上聲點が[H]もしくは[F]ピッチを、去聲點が[R]ピッチを表したと言はれる。

『古今和歌集』聲點本には、「連體形」の用例にのみ差聲されてゐる。だが『袖中抄』及び『日本書紀』聲點本には(8)の例がある。

「連體形」は、『日本書紀』聲點本で「ラム」に對し〈平平〉の註記があり、[LF]であつたと考へられる。「終止形」は六聲方式或は見かけ上の六聲方式による「ラム」に對する差聲がなされた資料がないので[LH]であつたか[LF]であつたかわからない。しかし「終止形」は他の場合、語末に下降があつたと考へられる。また、「連體形」で[LF]であらはれてゐるので、この「終止形」も[LF]であつたと考へるのが妥當

¹¹ 『日本書紀』聲點本は「六聲方式」の資料と「見掛け上の四聲方式」の資料の二種に分かれ、前者には岩崎本『日本書紀』、後者には前田本『日本書紀』以下が含まれる。

問題のモーラに宛てられた字への差聲が平聲點或は上聲點である場合、この表すピッチが前者であれば[L]か[F]か、後者であれば[H]か[F]かは、比較方法に據るか、他の差聲資料、例へば『類聚名義抄』『古今和歌集』聲點本の差聲を見て決定する事になる。(7)の例では『古今和歌集』聲點本が四聲方式であり且上聲點が文法語末に差されてゐるので、末尾は[H]若しくは[F]である。一方『日本書紀』聲點本の例は「見掛け上の四聲方式」資料の平聲點差聲例であるので、末尾は[L]若しくは[F]となる。因みに助詞は古く遡れば遡る程音調上獨立してをり、先行する自立語末の音調に影響を與へない。むしろ助詞側が影響を受ける。

この様な振舞と兩者の差聲の矛盾無き説明は、「助動詞ラム連體形」の末尾のピッチを[F]とする事以外によつては得られない。

である¹²。

若し假に「助動詞ラム」が「四段」動詞派生接辞であり、/(ur)ram//と分析され屈折接辞を取るのであれば、「ラム」部分の「アクセント」は「四段」動詞語根-屈折接辞の場合と同様になる筈である¹³。

處が実際にはその様になつてゐない。従つて是は更に分析できず、各「活用形」を屈折接辞と見なければならぬだらう。

3.2 「助動詞ラム」の基底形

次にこの「助動詞ラム」の基底形について考察する。(4)c から(4)fの事實から中古語ではその末尾が ramu (「終止形」「連體形」)、rame (「已然形」)である事が明らかである¹⁴。

表 4 中古語の「助動詞ラム」の表層形

活用種	四段	ラ變	ナ變	上二段	下二段	上一段	下一段	カ變	サ變
語根	kak	ar	sin	kopi	uke	mi	k ^w e	k	s ¹⁵
終止形	kakur amu	arur amu	sinur amu	kopur amu	ukur amu	mirur amu	k ^w erur amu	kura mu	sura mu

では、その初頭はどうであらうか。この言語の「動詞」＋「助動詞ラム」(「終止形」「連體形」)の表層形を、表 4 として示す¹⁶。

これを分析すると次の様になる。

¹² なほ、『古今和歌集』聲點本の他の差聲を見るに、〈平平〉注記も存在する。その状況を一見すると、或は活用形によつて異なつてゐたとも考へられるのだが、『袖中抄』『日本書紀』聲點本の例を見ると、その様には考へられない。やはり時代差を反映してゐるとすべきである。

¹³ この状況を「助動詞ラム」が「連體形」に「終止形」屈折接辞を取つた爲と説明する爲には、派生接辞/(ur)ram//と「動詞連體形」屈折接辞が何故共起せず、一意的に「動詞終止形」屈折接辞が選擇されるのか説明しなければならない。是は/(ur)ram//と「連體形」の意味分析次第である。此處ではその可能性は考へないが「ラ變」動詞の様な説明は恐らく不可能であらう。

¹⁴ 「ラ行」子音はおそらく /r/ であるが、以下 r で表記する。

¹⁵ サ行、ザ行子音は恐らく /ts/, /dz/ だが、以下 s, z で表記する。

¹⁶ 「已然形」でも同様であるので、ここでは省略する。但し、全ての實例があるとは限らない。例へば k^weruramu。猶、分析は「上一段」動詞の例が存在するので、この「下一段」動詞の實例がなくとも、問題無い。

- (9) a. 「四段」「ナ變」「ラ變」「カ變」「サ變」「下二段」「上二段」動詞では、u が現れる。
b. 「上一段」「下一段」動詞では ru が現れる。

(9)a のうち問題となるのは「下二段」「上二段」動詞である。これは u で始まる接尾辭（自他交替に關はる接尾辭を今除く）の初頭母音がこれら動詞の語基末の母音に對して勝利し、後者が削除されるからである（笠間裕一郎(2015)を參考にした）。

(9)b の解釋は三つの分析があり得る。

- (10) a.r までを語幹と見る。
b.r を挿入子音と見る。
c.r は屈折接尾辭の一部分と見る。

(10)a の解釋は例へば「連用形」の屈折接尾辭//i//を取つたときに、なぜ r が現れないのかの説明が出来ない。交替する語幹を立てればこの問題は消えるが、しかし、形態素の数は非常に多くなり非經濟的な記述となる。

(10)b の解釋は「助動詞ラム」の形態素基底形を//uramu//、//urame//とする解釋であり、この場合 r の挿入は母音連續の修復方略と考へられる。だが、その場合「連用形」でなぜ r が挿入されず、//i//の削除が生じるのか不明である。この問題の回避には、所謂母音語幹動詞の場合には「連用形」形態素として-øを想定する考へ方を取る必要があるが、この考へ方を取ると、やはり形態素が増えて非經濟的な記述となる。また-øではなく形態素なし（//nothing//）と考へても、ほかの屈折接尾辭（例へば先出の//azu//）を所謂母音語幹動詞が取つたときになぜ r が挿入されないのか不明である。

結局(10)c を取るのが最も合理的な解釋であるが、これにも次の様な解釋があり得る。

- (11) a.//ruramu//,//rurame//と考へる解釋
b.//ruramu//~//uramu//,//rurame//~//urame//と考へる解釋
c.//urramu//,//urrame//と考へる解釋

(11)a は所謂母音語幹動詞でなぜ[ruramu]、[rurame]で出力されない

か不明であるので取り得ない。

(11)b も形態素と規則の数が多くなり、(11)a および(11)c に對して不經濟な記述である。

一方(11)c は、文法語中の母音連続の回避と、この言語の基本音節構造(C)V¹⁷保持方略により、表 4 の出力を得たと考へることが出来る。夫々について考へてみると、「四段」「カ變」「サ變」「ナ變」「ラ變」動詞での rr 連続のうちの音節末子音側の削除、「二段動詞」での語幹末母音の削除と rr 連続のうちの音節末子音側の削除、「一段動詞」での ur の音位轉換として説明が出来る。表層で表れない音連続 ur を形態素基底形に想定する点のみが問題となるわけであるが、記述の実際においては、表層に表れない形態素//ø//を立てる事が一般に行はれてゐるので、やはりこの解釋が妥當といへるだらう¹⁸。

實際、形態素基底形を//urramu//とすることに據つてのみ、説明できる事柄が存在する。

それは、僅少なながらも中古語においても分節音挿入が「助動詞らむ」に對して現はれた例が、調査範囲では全三例存在する事實である¹⁹。

¹⁷ 少なくとも「助詞テ」による音便が生じた時は、(C)VC や(C)VV が現はれたと考へられる。

¹⁸ 是は語幹を次の様に分類する事により説明が出来る。所謂「四段」「ナ變」「ラ變」動詞語基と「カ變」「サ變」「一段」動詞語基、およびそれらを派生する接辭によつて派生された語幹を CLASS1 動詞語基、それ以外の動詞語基を CLASS2 動詞語基とする。CLASS1 動詞語基には削除が生じない。

「一段」動詞は語基末が母音で終はるが CLASS1 に屬し、所謂「子音語幹動詞」と同じクラスに屬する點がこの解釋で重要な點である。「一段」動詞の語基末が母音でありながら、削除が生じない事により音位轉換が引き起される。

これは、接尾辭ではなく付屬語でも同様である。

猶、この内の「母音語幹」動詞語基に限つては、Vovin(2003)に Weak と Strong の相違と云ふ形で言及がある。

¹⁹ (12)a の例に對しては、同一作品内に分節音挿入がない例も同一作品中に存在する。

- (iii) 宮、大宮「仲忠をば誰にか上は仰せらるらむ」(『うつほ物語』内侍のかみ)

また(12)b の用例に對しては、『枕草子』に次の様な例が存在する。少なくとも和文脈においては 1000 年前後まで分節音挿入が存在しなかつたとみて良いだらう。

- (iv) 「うたて、何しにさ申しつらむ」と思へど(『枕草子』)

- (12) a.いかばかりのつたなき者と御覧ぜられたれば、かう仰せらるるらむ (『うつほ物語』 藏開 下)
 b.まことにしもあらざらんものゆゑ、いそぎ申しつるらんとわびしかりけり (『狭衣物語』)
 c.いかなる懸想人尋ね来て、音なうて立ち帰りぬるらん。(『狭衣物語』)

この様な例は、例へば「助動詞ラム」(「終止形」「連體形」)の基底形を//ramu//や//uramu//とすると説明しがたい。前者では(u)ru、後者では(u)rを挿入する必要がある²⁰が、是は音韻論的、或は韻律形態論的説明が出来ない。前者は他の子音始まりの接辭で、後者は他の母音始まりの接辭で何故この挿入が生じないのか説明できない。

以上の議論より、「助動詞ラム」の形態素基底形は//urramu// (「終止形」「連體形」)、//urrame// (「已然形」)であると考へるべきである。²¹

²⁰ (u)の有無は「助動詞ラル」の分析次第で異ってくる。この問題は本論とは直接関係しないので、今は是以上述べない。

²¹ 處で、上代語ではどうであらうか。以下に上代語における出力を挙げる。

表 iii 上代語の「助動詞ラム」の出力

活用種	四段	ラ變	ナ變	上二段	下二段	上一段 A	上一段 B	カ變	サ變
語根	kak	ar	sin	ko ₁ pi ₂	uke ₂	mi ₁	ni	k	s
終止形	kakuramu	aruramu	sinuramu	ko ₁ puramu	ukuramu	mi ₁ ramu	niramumu	kuramu	suramu

問題は、中古語では「一段活用」動詞で表れて居た r が現れない事である。r が表層で表れないことを重視すると、この言語では、當然基底形は「助動詞ラム」なら//uramu// (「終止形」「連體形」)、//urame₂// (「已然形」)。上代特殊假名遣甲類を V₁、乙類を V₂ とする。以下同じ。なほ、音韻論的解釋には種種の論があるので、此處では何れか一つに據つて議論を進める (或はその系として中古語を考へる) ことはせず、中古語を基準としてその系として上代語を考へる) である。處が、通時的に見ると平安時代に至つて、突如 r が初めの u の後に挿入され、//urramu// (「終止形」「連體形」)、//urrame₂// (「已然形」) となつたと考へることになる。

このプロセスとしては、「助動詞ラム」を派生接辭とするにせよ、屈折接辭にするにせよ、「終止形」屈折接尾辭//ur//からの類推と考へるのが一つの考へ方である。しかしこの考へ方は、上代語において「終止形」屈折接尾辭//ur//で r が表層で實現するのは「見」を除く「上一段」動詞のみで、且語幹の直後

3.3 「助動詞ラム」の音調上の振る舞ひ

さて、「助動詞ラム」が非文法語であり、屈折接尾辭である事が明確になった。以下では、それが音韻的に獨立した形式であるか（すなはち付屬語であるか）、音韻的に獨立した形式でないか（すなはち接辭であるか）の検討を行なふ。

ここでは、3.1 同様各種聲點本を利用して、解答を與へる。

中古語の音韻語の決定には音調、國語學的には「アクセント」が用ゐられる。そこで、その「アクセント」の中でも院政期のそれを反映してゐると言はれる、『古今和歌集』聲點本の内の、院政期差聲資料に於ける「助動詞ラム」に對する差聲を見る。その状況は以下の通り²²。

に實現するにも拘らず、それ以外の環境（例へば派生接辭の直前）においても類推挿入される事を説明しなければならない。

もう一つの考へ方として、基底形は//urramu//（「終止形」「連體形」）、//urrame₂//（「已然形」）であるが/ur/若しくは/r/が削除されて、表Ⅲの様な表層形として出力されると言ふ考へ方がある。

この場合、通時的な説明は簡單であるが、表層形で完全に現はれない分節音を想定する事となる。

結局前者の解釋では、類推による變化はどの様に生じるのか、そしてどこまで生じるのかが問題になるし、後者の解釋では、形態素基底形の決定は一體どの様にして行はれるのか、果たして問題となる形式の表層形のみを参照して居るのが問題になる。

この點に關しては、筆者も答へを持ち合はせて居ないので、今後の調査課題である。なほ、この問題は「助動詞ラシ」でも生じる。これは後述する。

²² ほかの中古語の「アクセント」資料としては、『日本書紀』聲點本諸本や『和名類聚抄』（いづれも平安時代中期の「アクセント」を反映すると言はれる）『類聚名義抄』諸本が存在する。しかしながら、『日本書紀』聲點本諸本のうち、前田本以降の諸本は、「見かけ上の四聲方式」となつてをり、東聲點（あらはすピッチは[F]）が平聲點（あらはすピッチは[L]）と區別されなくなつてゐる（鈴木豊(1986)）。この爲、「助動詞ラム」が音韻的に獨立してゐるかどうか、これら資料からは分らない。『日本書紀』聲點本のうち岩崎本のみこの問題がないと言はれるが、残念ながら「助動詞ラム」に對する差聲がない。

従つて、現状「助動詞ラム」の音調上の振る舞ひは『古今和歌集』聲點本によつて議論すると言ふ次善の策を取らざるを得ない。

因みに、『日本書紀』聲點本を對象にして、この言語の「アクセント解釋」を行つた物として屋名池誠(2004)と早田輝洋(1999)が存在する。前者は「抑壓限界」と下げ核、後者は三聲調と（音節境界に存在する）下げ核による解釋である。

なほ、『日本書紀』聲點本の聲點が反映する處の「アクセント」システムについて、笠間裕一郎(2014)は、『琴歌譜』と對照し、「助詞テ」の（「アクセント」資料から推察される）音調上の振る舞ひから、貞觀年間以前のそれである可能性がある事を述べる。

(13)((7)の再掲)a.とはるらむ（問はるらむ）（「連體形」）

上上平平上（顯天片）

b.みらむ（見らむ）（「終止形」）

○平上（梅・京中・高嘉・伊・清聲）

(14)((8)の再掲)a.『袖中抄』（第二十（高松宮本））

コモチマチャセヌラム（子持待ち瘦せぬらむ。「終止形」）

上上上平上上平上平上

b.『日本書紀』聲點本

比騰彌都羅武箇（人見つらむか「連體形」）（卷第二十五）

上平去上平平上（北野本、兼右本、内閣文庫本）

聲點の解釋は 3.1 に述べた通り。

さて、語根と「助動詞ラム」の間には「アクセントの谷」が存在してある。この方言の「アクセント」システムには服部四郎(1973)、金田一春彦(1983)、中井幸比古(2003)の上げ核（昇り契機）と下げ核（降り契機）による解釋、金田一春彦(1983)、秋永一枝(1980)(1991)のトネーム論的解釋、早田輝洋(1998)の三聲調と拍境界に存在するアクセントによる解釋、屋名池誠(2004)の「抑壓限界」とモーラが擔ふ下げ核による解釋等が存在するが、いずれにしても是等解釋は「アクセントの谷」は「語」境界の存在を表すとする^{23,24,25}。

つまり「助動詞ラム」は、文法的には先行する形式に依存してをり、動詞の内部要素であるが、一方で音韻的には先行する形式（ここでは語幹）と獨立してある、つまり音調上異なるドメインを形成してある形式である。そしてこの形式の末尾には下降があつたとされる（秋永

²³ 例へば、屋名池誠(2004)では「助動詞リ」を「分節音形としてはすでに両者の間で音融合が起きているにもかかわらず、アクセント上はいまだ 2 語としての姿を保っている」として（言語學的）助動詞としてゐる。これは前接語が（屋名池誠(2004)の言ふ）一系列の時に「助動詞リ」の前に「アクセントの谷」が（一般に）現はれるからであらう。

²⁴ 猶、この方言の「アクセント」システムに就て筆者は是等先行研究とは異なる解釋を考へてゐるが、本稿では、當座聲調に關しては早田輝洋(1999)に従ひ高起・低起・上昇の三聲調を考へ、アクセントに就てはモーラが擔ふ下げ核による解釋を行なふ。

²⁵ 猶、筆者は必ずしも先行研究の様に「「アクセント」の谷があれば音韻語の境界が存在する」とは考へてゐない。筆者は、音韻語の境界は有核非複合語の場合、形態素の終端のピッチが下げ核により **高くない時**存在すると考へる。

一枝(1991)、屋名池誠(2004))。この下降を下げ核の存在によると考へると、これは丁度 Hakka lay 語に於けるアクセントを持つ接辞 -láay (Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology Department of Linguistics(2008)) と並行的な、アクセントを持った接尾辞、即ち本稿の定義では付屬語である²⁶。

3.4 「助動詞ラム」の撥音形「ラン」の形態論的位置づけ

處で、「助動詞ラム」には、その撥音形として「ラン」が存在する。以下、その形態論的位置づけについて論ずる。「ラン」の用例について、「中納言」を用ゐて検索をするに、次の用例が初出の様である²⁷。

²⁶ これを本稿の様に付屬語といふ別カテゴリに屬する形態素とせずに、單なる音調上獨立のドメインを形成する、或は「固有の音調」(＝「アクセント」)を持つ接尾辞とする考え方もあり得る。

然し乍らこの考え方では、音調上獨立のドメインを形成してゐること、或は「固有の音調」(＝「アクセント」)をその形態素が持つことが、當該の形態素が「語」であることの決定的な條件とすることが出来なくなる。

この時、考へられる方策は以下の2つである。

- (v) a. (音調上獨立のドメインを形成する、或は「固有の音調」(＝アクセント)を持つが、) 例外的に接尾辞であるとする。
b. (音調上獨立のドメインを形成する、或は「固有の音調」(＝アクセント)を持つので、他の條件に關らず、)「語」の内部要素ではない即ち獨立した「語」であるとする。

(v)aの考へ方に立つと、記述上の一貫性を放棄し「例外」であると強辯することになる(實際には、「アクセント」を「語」の定義に用ゐることに對する反證とも言へてしまふ)。(v)bの考へ方は上に見てきた諸特徴を持ちながら、「助動詞ラム」は「語」であると、これまた強辯することになる(實際屋名池誠(2004)はこの立場を取る。屋名池誠(2004)には、これによる分析上の誤り及び餘乗性が見られるが、これは別の機會に論ずる)。

結局、本稿の様に音韻語と文法語を分立し、各々別の定義を與へて各形態素を分類しないと、この言語では論理的な無理が生じる。

やはり論理的な一貫性からも、付屬語と言ふ別カテゴリを立て、「助動詞ラム」をそこに屬させるべきである。

²⁷ 『日本国語大辞典』(第二版)では

- (vi) 心ざし深く染めてし居りければ消えあへぬ雪の花と見ゆらん(『古今和歌集』春上・七)

などに「ラン」を認めて居るが、『日本国語大辞典』は用例の校訂をせず、どのような資料でも出現したものは掲出する編纂方針を採つてゐるので、ここでは校訂を行つてゐる資料に基づく「中納言」に従ふ。

- (15) a. 人も心弱く見たてまつるらんと (『源氏物語』 桐壺)
 b. 雲のうへも涙にくるる秋の月いかですむらん 浅茅生の宿
 (『源氏物語』 桐壺)
 c. いとかう心幼きをかつはいかに思ほすらん (『源氏物語』 空
 蟬)
 d. 亡せてこの十余年にやなりはべりぬらん。(『源氏物語』 若紫)

(15)a は所謂「終止形」の例。(15)b は所謂「連體形」の例。但し歌謡。(15)c は所謂「連體形」の歌謡ではない例。但し玉鬘系の巻の例。(15)d は所謂「連體形」の歌謡ではない例で、紫上系に属する巻の例²⁸。

そのほかの資料としては『讃岐典侍日記』にその用例が見られるのみである。つまり、平安時代後期(西暦 1000 年以降)成立の資料にこれらの用例が見えるのである。

築島裕(1969)でも、「助動詞ラム」について言及して居るが、この撥音形については言及して居ない。

おそらく、平安時代後期(西暦 1000 年以降)にこの「ラン」は出現する。であれば、平安時代中期以前は//urramu// (「終止形」「連體形」、//urrame// (「已然形」)を設定すればよい。だが、それ以降はこの「ラン」が「終止形」「連體形」//urramu//の異形態/urram/²⁹であるか、「終止形」「連體形」//urramu//とは別の形態素//urram//であるかの問題が生じる。

そこで、「中納言」の検索結果を見るに、そこから何らかの出現条件が見いだせるわけではない。例へば次の通り。

- (16) a. このなやましきこともいかならんとすらむ、いみじく命短
 き族なれば、(『源氏物語』 宿木)
 b. はかなくなりなむとすらん、と思ふには、惜しからねど、
 (『源氏物語』 宿木)

文體、人物その他の条件が複雑に絡んでゐるかもしれないが、ここでその検討をする餘裕はない。しかし、これら「ラム」「ラン」に

²⁸ 『源氏物語』第一部全體を二系統(紫上系・玉鬘系)に分割する説は武田宗俊(1950)を参照。前者と後者、執筆に當つて先後関係があると言ふ。

²⁹ 原音素/N/を認めても良いが、最小對が得られるか疑問である。本稿では認めない事とする。

意味的な相違が見いだされてきたわけでもないので、現状では平安時代後期以降//urramu//~//urram//（「終止形」「連體形」）、//urrame//（「已然形」）となつたと考へるのが合理的であらう³⁰。

4 3章の議論から派生して得られる見解

3章では、所謂「助動詞ラム」に關はる形式に就て考察を行つた。4章では3章の議論から導出される、(17)に示す見解に就て述べる。

- (17) a.動詞のアクセント情報は語幹側に存在してゐる事
b.助動詞「ラシ」も中古語では//urrasi//（「終止形」「連體形」「已然形」）である事

4.1 動詞のアクセント情報位置

次に動詞のアクセント情報はどこにあるかに就て考察する。動詞のアクセント情報の基底の位置に就て、取り得る見解は二つである。猶、この方言の「アクセント」システムに就ては、先に述べた如く、當座高起・低起・上昇三聲調とモーラが擔ふ下げ核によるとする。

- (18) a.接尾辭側に存在する
b.語根側に存在する

³⁰ 「終止形」「連體形」が表記上は「らむ」と書かれて居るが、その發音は[ram]で有つたと言ふ可能性は、他の表記（例へば撥音無表記・撥音「つ」表記等）が見られない事から、蓋然性は低いと思はれる。因みに「あんなり」の撥音無表記「あなり」は本稿での依據テキストに多く現れる。

また、撥音形が生じた場合に、その形式の形態論上の位置づけが問題となる形式として他に「助動詞ム」がある。これも「中納言」でその用例を検索するに、やはり「ン」として表れるのは、ほぼすべてが平安時代後期以降の作品からである。唯一『竹取物語』に一例「ン」として表れる用例が見つかる。

- (vii) 嘆かせたてまつらぬほどまで侍らん。

この用例の存在を重視すれば、平安時代中期以前も「助動詞ム」（實は屈折接尾辭//amu//（「終止形」「連體形」、//ame//「已然形」））には、「終止形」として//amu//~//am//を立てる事になる。しかし、孤例であるから後世の誤寫或いは誤傳と考へると、//am//を立てる必要はない。これについては寫本の問題もあるので今後の詳細な調査が必要である。

接尾辭側に存在すると言ふ見解として、屋名池誠(2004)が指摘できる。ここで 3.3 の議論を思ひ出されたい。「助動詞ラム」は屈折接尾辭でありながら音調上獨立したドメインをなす形態素、即ち付屬語であつた。もし一般に、基底で接辭側にアクセント情報（この場合下げ核）が存在するのであれば、屋名池誠(2004)で+系列（即ち低起・上昇聲調）の動詞ならば一般に 3 モーラ以下で文法語末、4 モーラ以上で文法語次末、一系列（即ち高起聲調）の動詞ならば一般に文法語次末モーラにアクセント（下げ核）が置かれる以上、語幹と接尾辭の間に、「アクセントの谷」が生じない筈である³¹。しかし以下に舉げる(19)と、(20)の「助詞テ」の例では語幹と接尾辭の間に「アクセントの谷」が生じ、下げ核が接辭側にはない事を示す。

(19) (7)の再掲)

a. とはるらむ（問はるらむ）

上上平平上（顯天片）

[HHLLF]

b. みらむ（見らむ）

○平上（梅・京中・高嘉・伊・清聲）

[○LF]

（見方は(7)に準じる。但し、聲點より想定されるピッチの○は、聲點がないために不明である事を示す。）

次に「助詞テ」が「四段」動詞に後續し、音便を引き起こした場合の例を『類聚名義抄』から舉げる。

- (20) a. 玲瓏 カヽヤイテ
 上上上平上 （圖書寮本一六一 6）
 [HHHLH]
 b. 越 オイテ

³¹ 例へば、「助動詞ズ」（屈折接尾辭相當の付屬語）は音調上獨立したドメインをなしながらアクセントを持たないので、次の様になる。

- (viii) 伊弊母始羅孺母（家も知らずも。「終止形」）
 平平東上上平東（岩崎本 351）
 [LLFHHLF]

c.績
上平上 (高山寺本三五ウ 6)
[HLH]
エカイテ
平平上平³² (観智院本法中一一六 8)
[LLHL]

この場合の「助詞テ」は、極性のみで対立する所謂「打消しの助詞デ」(實は屈折接尾辭相當の付屬語//ade/)がこの時代に生じてをり、また、「四段」「ラ變」動詞の所謂「未然形」を除く「動詞活用形」で音節数が一致する効果の影響を受けて居る。故に、屈折接尾辭或はそれ相當の獨立した音調上のドメインを形成する、本稿の定義の付屬語になつて居る(笠間裕一郎(2014))³³。

付屬語//te//の前に「アクセントの谷」が生じて居る。だが、//te//自體が[F]で表れて居るとは、『日本書紀』聲點本の例を考へ合はせるに、考へがたい。『日本書紀』聲點本の例は以下の通り。

- (21) a.伊比爾惠亘(飯に飢て)
平平平東上(岩崎本 322)
[LLLFH]
上上上東上(岩崎本 320)
(鈴木豊(2003)による)

³² この時代の「助詞テ」の音調實現は揺れる。この「助詞テ」の解釋は笠間裕一郎(2014)を參照。上例は「助詞テ」が形態的にも音調上も取り込まれ、接辭となつた例である。因みにこの例はこの言語のアクセントが下げ核である事も示してゐる。

³³ 例へば、語幹の分節音数が 2~3 であれば、次の表のごとくなる。

表 iv 所謂「動詞活用形」一覽

活用種	語根		連用形	テ形	終止形	連體形	已然形	命令形
四段	kak	基底	kaki	kakte	kakur	kakuru	kakure	kake
		表層	ka.ki	kai.te	ka.ku	ka.ku	ka.ke	ka.ke
ラ變	ar	基底	ari	arte	ari	aruru	arure	are
		表層	a.ri	at.te	a.ri	a.ru	a.re	a.re

屋名池誠(2004)を参照するに、所謂「未然形」を除く「動詞活用形」でその音調上の表れが異なるのは付屬語//te//による「テ形」を除けば、「連體形」のみである。先に述べた如く、それ以外は屋名池誠(2004)で+系列（即ち低起・上昇聲調）の動詞ならば一般に3モーラ以下で文法語末、4モーラ以上で文法語次末、－系列（即ち高起聲調）の動詞ならば一般に文法語次末モーラにアクセント（下げ核）が置かれる。この「助動詞ラム」((19)の例)と「助詞テ」((20)の例)で、それ等の前の語幹部分で生じてゐる事から、この方言の動詞は基底で語根側にアクセントがあり、音韻語の次末或いは語末まで移動すると考へるべきである³⁴。

猶、「アクセント」的には「連體形」のみが特殊である。そこで、この言語の形態分析をしていくと「連體形」のみが（係り結び文、或いは名詞句を構成する場合を除いて）節末に現れる形式ではないといふ事実が浮かび上がってくる。

つまり、この言語の動詞のアクセントは音韻的節境界の表示機能を持つて居る³⁵。「連體形」は（係り結び文、或いは名詞句を構成する場合を除いて）節末には立たないので、語根側から付與されるアクセントが屈折接尾辭相當の付屬語//uru//によつて取り消されるのである。

節境界がほかの戰略によつて標示されるのであれば、アクセントは取り消される。例へば屈折接尾辭が音調上獨立したドメインを形成してをり、かつ、「低起式」或いは接辭末の「抑壓限界」によつて、語末のピッチが低く表れる場合、語幹末へのアクセントの付與が生じたりはしない。故に語末に下降が現れたりしない。係り結び文も、先行する係助詞「ゾ」「ナム」「ヤ」「カ」によつて節末である事が予告されるので、屈折接尾辭によつてアクセントが取り消されるのである。

4.3 中古語に於ける「助動詞ラシ」の形態論的位置付と、その基底形

「助動詞ラム」に関連する形式として「助動詞ラシ」が存在する。

³⁴ この段落のみを見ると語幹側の聲調に従つて、接辭側に存在する下げ核が移動すると考へられさうであるが、この考へ方では(19) ((7)の再掲)の「助動詞ラム」の如く、二度文法語内で下降が現れる場合、語幹側の下降が説明できなくなる。當然下げ核の位置情報が接辭側にあると言ふ見解も、現實には語幹側の聲調次第であるので、この考へ方も出来ない。

³⁵ 形容詞はまた別である。猶、統語的には、助詞が続いて後置詞句が形成される事もある。

こちらは「助動詞ラム」と異なつて、中古語では所謂「不變化助動詞」である。これも「助動詞ラム」同様に、

- (21) a. 單獨で現れる事なく、
b. 特定の品詞（ここでは統語的動詞・助動詞）に屬する語ともに現れ、
c. 常に「動詞」が u で終はり、
d. 一定の活用形を要求せず、
e. それ自身は特定の「活用形」のみを持ち、
f. 連續する形式の最末尾に現れる。

此處から、「助動詞ラシ」は屈折接尾辭（屋名池誠(2004)を参考にすれば付屬語）である（Vovin(2003)はこの解釋）。表 5 はその表層形。

表 5 中古語の「助動詞ラシ」の出力

活用種	四段	ラ變	ナ變	上二段	下二段	上一段	下一段	カ變	サ變
語根	kak	ar	sin	kopi	uke	mi	k ^w e	k	s
終止形	kakura si	arura si	sinura si	kopura si	ukura si	mirura si	k ^w erura si	kura si	sura si

表 5 から基底形は//urrasi//とする。理由は、「助動詞ラム」、「終止形」屈折接尾辭と同様である。

處が、この「助動詞ラシ」は平安時代以降「歌語化」したといはれる。すでに歌謡の様なある種の作品にしか表れないのであれば、「文語」とみてこの方言の共時態からは外しても問題はない。實際「中納言」にて用例を検索するに、歌謡の例しか見いだされない。これは『蜻蛉日記』(974 頃成立)、『宇津保物語』(969～1011 頃成立)を見ても、同様である。猶、訓點資料には次の様な例が見いだされる。

- (22) 〔於〕四方を顧み視ルに、猛キ火の周遍せるが如クあるラシ
(830-01 金光明最勝王經一九九 10)
(築島裕(1969)より)

この例は所謂「動詞終止形」である。だが、この例は平安時代ごく

初期の用例で、前代の上代語では註 35 に述べる様に「助動詞ラシ」は派生接尾辭である。この用例の時代に於いては、猶上代語同様に派生接尾辭であつたとも考へられる。實際、動詞屈折の體系性からすると、派生接尾辭であると考えた方がよい。この例より後は「歌語」と言ふべきであるので、中古語の共時態からは外れる³⁶。

³⁶ 一方で、先に述べた如く、上代語では「助動詞ラシ」は屈折接尾辭ではない。

「助動詞ラシ」は『時代別国語大辞典 上代編』では、連體形として「ラシキ」および「ラシ」で表れるとされる。しかしながら、『新潮国語辞典 第二版』では、「ラシキ」のみを取るとされる。また『萬葉集電子総索引』によれば、「連體形」で「ラシ」が表れた用例はないとされる。

ここで、上代語即ち奈良時代日本語奈良方言の基本的言語資料である『古事記』『日本書紀』『萬葉集』『佛足石歌』『歌經標式』『續日本紀宣命』『祝詞』における「ラシ」の用例を検索するに、(ix)a の様な用例は見いだせるが、「連體形」として「ラシ」が表れたと考へられる用例は見いだせない。むしろ(ix)b の様な用例が見いだせる。

- (ix) a. コソ～ラシキ
 b. [～ラシキ]_{NP}

(ix)a の用例は、係助詞「コソ」の結びとして「ラシキ」が表れる用例である。「コソ」は一般に結びとして「已然形」を取るが、形容詞では「連體形」を取る事がある。これは形容詞の活用の發達が遅れたためと説明されるのが常である(大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編(1990)等)。文脈を見ても「已然形」と解釋すべき理由はないので、この「ラシキ」は「連體形」と考へるべきである。

(ix)b の用例は、名詞句を形成して居る用例であり、これも「ラシキ」が「連體形」である證左となる。

では、なぜ『時代別国語大辞典 上代編』では「連體形」として「ラシ」が認められて居るのだろうか。『萬葉集電子総索引』を用ゐて調査すると、次の様な用例が見つかる。

- (x) 三香原 布当の野辺を 清みこそ 大宮所 (一に云ふ「ここと標刺し」)
 定めけらしも (巻第六 1051 番歌)

要するに、「ケラシ」を『時代別国語大辞典 上代編』では分析して居るのである。しかしながら、この「ケラシ」は「ケ」若しくは「ケル」+「助動詞ラシ」と分析すべきではない。それは、この「ケラシ」の音調は『古今和歌集』聲點本諸本(差聲開始期の資料含む)の差聲から見ると[HLL]であり、「ケ」若しくは「ケル」+「助動詞ラシ」(秋永一枝(1993)によれば常に[HL]。のち[LL])と分析できる音調ではないからである。

結局、「助動詞ラシ」はこの時代、形容詞の屈折接尾辭//si// (『終止形』) 及び//iki// (『連體形』) を取るので派生接尾辭である。

猶、上代語におけるその基底形は、先述の「助動詞ラム」同様二通りあり得る。何れが妥當かは改めて論じたい。上代語におけるその出力は次の通り。

表 v 上代語の「助動詞ラシ」の出力

5 終はりに

以上、「助動詞ラム」とそれに関連する幾つかの形式とトピックに就ての諸問題に就て論じた。主要な考察結果を纏めは次の通り。

- (22) a. 「助動詞ラム」は屈折接尾辭相當の付屬語
 b. その基底形は//urramu// (~/urram// 「終止形」 「連體形」) ,//urrame// (「已然形」) である事
 c. 動詞のアクセントは語根側に存在する事
 d. 中古語の「助動詞ラシ」の基底形も//urrasi//である事

上代語における「助動詞ラム」「助動詞ラシ」の基底形等に未解決の部分が存在するが、本稿の議論により、國語學的にも言語學的にも幾つかの實りある見解が得られたと思はれる。

これまでの國語學では、形態分析が疎かにされてきた處であるが、周到な形態分析が行はれると、これまで國語學でも言語學でも氣付かれてこなかつた事實・問題を明らかにする事が出来ると言へよう。

謝辭

本稿は第 258 回筑紫日本語研究会(2015/02/28 於九州大学)に於ける口頭發表『助動詞らむをめぐつて』を元に加筆修正を加へた物である。加筆修正に當つては、口頭發表時に頂戴した適切なコメントと投稿後の二名の査讀者による適切な査讀コメントを参考にした。これらに對し感謝申し上げる次第である。

参考文献

Booij, Geert(2012)*The Grammar of Words: An Introduction to Linguistic Morphology* 3rd ed. New York: Oxford University Press
 Greenberg, Joseph H.(1963) ”Some universals of grammar with particular

活用種	四段	ラ變	ナ變	上二段	下二段	上一段 A ³⁶	上一段 B	カ變	サ變
語根	kak	ar	sin	ko ₁ pi ₂	uke ₂	mi ₁	ni	k	s
終止形	kakura si	arura si	sinura si	ko ₁ pura si	ukura si	mi ₁ ra si	niras i	kuras i	suras i

- reference to the order of meaningful elements” J.H.Greenberg(ed.)
*Universals of Language:Report of a Conference held at Dobbys Ferry,
 NewYork, April 13-15,1961.* Cambridge, Massachusetts:MIT Press
- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims(2010)*Understanding Morphology*
 2nd ed. London Hodder Education
- Haspelmath, Martin(2011) “The indeterminacy of word segmentation and the
 nature of morphology and syntax” *Folia Linguistica* 45(1) Berlin/New
 York: Walter de Gruyter GmbH & Co.KG
- Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology Department of
 Linguistics (2008) “The Leipzig Glossing Rules” Reversed version.
- Vovin, Alexander(2003) *A Reference Grammar of Classical Japanese Prose*
 London & New York: Routledge Curzon
- 秋永一枝(1974)『古今和歌集声点本の研究 索引篇』校倉書房
- 秋永一枝(1980)『古今和歌集聲點本の研究 研究篇上』校倉書院
- 秋永一枝(1991)『古今和歌集聲點本の研究 研究篇下』校倉書院
- 秋永一枝他(1998)『日本語アクセント史総合資料 研究編』東京堂出
 版
- 大木一夫(2010)「古代日本語動詞の活用体系—古代日本語動詞形態論
 試論」『東北大学文学研究科研究年報』59
- 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編(1990)『岩波古語辞典 補訂版』岩波
 書店
- 笠間裕一郎(2014)「テ形・音便・アクセント」『語文研究』118
- 笠間裕一郎(2015)「音節構造と國語史」『文献探究』53
- 金田一春彦(1983)「方向観による平安朝アクセント」*Sophia Linguistica*
 11 Tokyo: Sophia University
- 黒木邦彦(2012)「二段動詞の一段化と一段動詞の五段化」『日本語はど
 のような膠着語か—用言複合体の研究—』笠間書院
- 鈴木豊(1986)「和語の声点資料における差声の体系について 「日本書
 記」声点本を中心として」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊
 文学・芸術学編』12
- 鈴木豊(1999)「アクセント史研究における拍内下降」『国文学研究』128
- 鈴木豊(2003)『日本書紀人皇卷諸本 声点付語彙索引』アクセント史資
 料索引 19 アクセント史資料研究会
- 武田宗俊(1950)「源氏物語の最初の形態」武田宗俊(1954)再録
- 武田宗俊(1954)『源氏物語の研究』岩波書店

- 築島裕(1969)『平安時代語新論』東京大学出版会
 中井幸比古(2003)「アクセントの変遷」上野善道編『朝倉日本語講座』
 3 朝倉書店
 服部四郎(1950)「附属語と附属形式」服部(1960)再録
 服部四郎(1960)『言語学の方法』岩波書店
 服部四郎(1973)「アクセント素とはなにか？そしてその弁別的特徴とは？——日本語の“高さアクセント”は単語アクセントの一種であって、“調素”の単なる連続にあらず——」『言語の科学』4
 早田輝洋(1998)「平安時代京畿方言の音調」『大東文化大学紀要 人文科学』36
 屋名池誠(2004)「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』8(2)

上代語依據文獻

- 『古事記』 土橋寛(1972)『古代歌謠全注釈 古事記編』角川書店
 『日本書紀』 土橋寛(1976)『古代歌謠全注釈 日本書紀編』角川書店
 『萬葉集』 古典索引刊行会編(2009)『萬葉集電子総索引』塙書房
 『佛足石歌』 天理大学国文学国語学科古典文学を学ぶ会編(1982)『仏足石歌用語索引』天理大学国文学国語学科古典文学を学ぶ会
 『歌經標式』 沖森卓也(2008)『歌經標式：影印と注釈』おうふう
 『續日本紀宣命』 北川和秀(1982)『續日本紀宣命 校本・総索引』吉川弘文館
 『祝詞』 沖森卓也編(1995)『東京国立博物館蔵本 延喜式祝詞總索引』古典研究会

中古語依據文獻

- 『古今和歌集』『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『うつほ物語』『落窪物語』『堤中納言物語』『枕草子』『和漢朗詠集』『源氏物語』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』『讃岐典侍日記』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』『栄花物語』『大鏡』『今昔物語集』『住吉物語』『とりかへばや物語』『将門記』『陸奥話記』(小学館「新編日本古典文学全集」)(国立国語研究所日本語歴史コーパス「中納言」『古今和歌集』『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『土佐日記』『落窪物語』『堤中納言物語』『枕草子』『源氏物語』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』『讃岐典侍日

記』)

『袖中抄』

館蔵史料編集会『国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢
書 文学篇 第十四卷〈歌学書三〉』臨川書店

On the morphological characterization of the Auxiliary verb RAMU and its related issues

Yuichiro Kasama

Tokyo University of Foreign Studies

The author is going to discuss on morphological and phonological properties of, in traditional Japanese study KOKUGOGAKU, so-called auxiliary verb RAMU and related some linguistic issues --especially verb's that-- of Classical Japanese in this paper.

In previous studies, this form, for instance KOKUGOGAKU, is thought as one of Auxiliary verb, but the other hand, this form was thought as inflectional clitic (for example Ooki(2010)) and so on.

Against these previous studies, the author argues that this RAMU is inflection suffixes based on following 6 reasons.

(1)All these, are so-called RAMU's "word forms" in KOKUGOGAKU, are able to appear alone. (2)All these appear with words belonging to specific "part of speech". (3)"Verbs" always ending with [u]. (4)All these do not require specific "Word form". (5)RAMU itself has only specific "Word forms". (6)All these appear in a final position of continuous forms.

And, the author suggests it is fair that the underlying forms of this RAMU are //urramu//, //urrame// in Classical Japanese of Kyoto dialect, Hei'an era, from very rare cases which these surface form are [urura...].

And so, By seeing records of Sho-ten materials, these reflect prosody – especially word that--, the author argues that it shows that this RAMU are suffixes making a phonological independent domain.

In addition, the author suggests following points as matters related to RAMU.

- (1)The accent of verb is in root, not in suffixes, Underlyingly.
- (2)Underlying form of the so-called Auxiliary verb RASI is //urrasi//, too.

(初稿受理日：2015年4月30日，最終稿受理日：2015年12月25日)